

# Essay

Sapiarc.com

2012年5月7日(2012-04)

## 「戦争と平和」再読

長い間かけて「戦争と平和」を再読した。再読したというのは、60年ほど前、高校2年生のときに読んだと思っていたからだ。高校の図書館から借り出した岩波文庫本で読んだという記憶がある。しかし、今回読んでみて、憶えていたのは主要な登場人物の名前と断片的な場面だけだったので、初めて読んだようなものだった。とくに、後半、つまり、ロシア軍とナポレオン・フランス軍が本格的に対戦したボロジノの戦い以後のことに関する記憶は極めて曖昧だった。この本は後半の方が面白いのだが、その後半の記憶が薄れていた。これは本当には読めていなかったことの証明かもしれない。早熟な人ならばともかく、普通の16歳がこの本を十分に理解するのは難しいだろう。

今回読んだのは、米川正夫訳の岩波文庫の全4巻だ。どの巻も約600ページの部厚いもので、全部で2,421ページにのぼる超大作だ。私は10年ほど前にこの4巻を買ったが、そのままになっていた。現在、岩波文庫では、この米川訳ではなく、藤沼貴訳の全5巻が出版されている。藤沼訳の方がずっと新しいものなので、多分読みやすいはずだが、5巻の値段は5千円ほどなので、買ったまま放置していた米川訳を読んだ。言葉づかいに古めかしい感じはあるが、読むのに差し支えることはなかった。(余談：米川正夫は1965年に死去。藤沼貴は早稲田大学教授だった人だが、今年1月に80歳で亡くなった。)

今回この本を読んで、まず感じたことは、これはトルストイが書きたくてたまらなくて書いたものだという事だ。トルストイがこの本を書き始めたのは1864年で、そのとき彼は36歳だった。はじめから超大作を書くつもりだったわけではなかったが、書くにしたがって興が乗って構想が拡大し、書き終わったのは5年後の1869年だった。その間に、トルストイは多くの文献を渉猟して、アウステルリッツの戦い(1805年)からナポレオン軍のモスクワ占領とそれに続く退却・大敗北(1812-1813年)の全過程を詳しく調べたようだ。

偶然だが、今年にはナポレオン軍のモスクワ占領から200年に当る。この記念すべき年に、この本を読んだのは不思議なめぐり合わせだと感じている。日本では、これより4年前の1808年に間宮林蔵が樺太を探検しており、伊能忠敬が日本の地図を作っていた(完成は1821年)。ヨーロッパの動乱は、日本にはどのような形で伝わっていたか、興味のあることだ。

トルストイがこの本を書いたときは、大戦争が終わってからまだ半世紀しか経っておらず、トルストイは祖国ロシアが経験した大戦争に強い関心を抱いていたようだ。大戦争の記憶はまだ風化していなかったから、必要な情報を集めることは容易だっただろう。トルストイは、この本のなかで独自の戦争観・歴史観を繰り返し述べている。これこそ、彼が第一に書きたかったことだ。

大戦争においては、政府や軍の首脳など政治・軍事のリーダーたちが果たす役割を過大に評価するのは誤りだというのが、トルストイが一貫して述べている主張だ。とくに、一旦戦闘が始まってしまうと、戦争はそれ自身が意思をもっているかのように進むので、戦術の天才の名を欲しいままにしたナポレオンも何もできなかったのが真相だというのだ。

この点をわかっていたのは、ロシア軍総司令官ミハイル・クトゥーゾフのみで、だからこそクトゥーゾフは、ボロジノの会戦のあと、無理なモスクワ防衛戦を展開しようとはせず、後退を続けた。必ずしも焦土作戦を意図したわけではなかったのだが、結果的にそうなる、期せずしてナポレオン軍を退却せざるを得ない状況に追い込んだのだ。退却するナポレオン軍とそれを追撃するロシア軍は、季節が酷寒の冬となったこともあって、双方とも多数の犠牲者を出した。とくにナポレオン軍はほとんど消滅してしまい、その結果、ナポレオンは退位することになる。

フランス革命以後の、とくにナポレオンが権力を掌握した後のヨーロッパは異常な時代で、フランス人だけでなくヨーロッパ大陸の他の国の人々の間でもナポレオン崇拝、戦争待望の気分が高まったのだ。これがナポレオンのモスクワ遠征つながるのだが、ロシアの貴族社会においてすらナポレオン崇拝熱があり、戦争で手柄を立てたいという好戦的な雰囲気があった。そういう時代背景は、この本によく書かれていると思う。

ナポレオン軍は今日でいう多国籍軍で、12カ国語が話されていた。対するロシアでも、宮廷や貴族社会では、日常的にフランス語が話されており、ナポレオン軍がモスクワに迫ってきて、ようやくフランス語で話すことが禁止された。ロシア軍には、ドイツ人の軍人が多数おり、フランス人さえいた。この大戦争は、フランスとロシアとの戦争という単純なものではなかったのだ。

トルストイが書きたかったもうひとつのことは、自分自身、両親、その他の血族を含むロシアの貴族社会の人間模様だ。トルストイは伯爵家を継いだ人で、祖先にはロマノフ王朝で重要な地位にあった人たちがいた。この本には、約500人にのぼる登場人物がいると言われているのだが、主要な人物といえば、男性では、アンドレイ・ボルコンスキー、ピエール・ベズーホフ、ニコライ・ロストフの3人、女性では、ナターシャ（ニコライの妹）とマリヤ（アンドレイの妹）の2人ということになるだろう。

これらの人物のモデルは、すべて実在した人物だとされている。ロストフ伯爵家のモデルはトルストイ伯爵家であり、ニコライ・ロストフのモデルはトルストイ自身の父親ニコライだ。ボルコンスキー公爵家のモデルは、トルストイの母親の実家であるヴォルコンスキー公爵家（本の中では、ヴォがボに変えられている）で、マリヤのモデルはトルストイの母親マリヤだ。ヴォルコンスキー公爵家は名門中の名門で、トルストイの優れた資質はこの家系出身で多能の人だった母親ゆずりだったとされている。ベズーホフ家のモデルは同名の伯爵家だったようだ。

ヒロインのナターシャのモデルは、トルストイ夫人ソフィアの妹タチアーナだとされているが、トルストイ自身は夫人のソフィアもモデルだと言っていたそうだ。物語のはじめでは13歳ぐらいの可憐な少女だったナターシャは、大戦争の2年ほど前に、アンドレイと婚約し、あとでそれを自ら解消するが、ボロジノの会戦で瀕死の重傷を負ったアンドレイを献身的に看護して看取る。のちにピエールと結婚して4人の子供を持つ。この物語で描かれる10数年間に、さまざまな経験を積むナターシャという美しい女性が、人として成長していく過程の描写は素晴らしく、この物語を魅力的なものにしている。

トルストイは、自分自身をアンドレイとピエール（ロシア語ではピョートルのはずだが、この本では常にフランス語のピエールと呼ばれている）に分けて描いたとされているのだが、この本を読むと、確かにそうだっただろうと感じられる。とくに、理想の社会を夢見るピエール

には、後年平和主義を唱えたトルストイ自身の性格が色濃く投影しているようだ。

対照的に、アンドレイは理知的で、優れた実務能力の持つ現実主義者であり、当時のインテリゲンチアを代表する人物だ。ボロジノの会戦には、歩兵連隊長として出陣し、重傷を負う。後送された先で、ナターシャとマリヤの看護を受け、ある意味では幸せな最期を迎える。アンドレイとナターシャの間のひと口には表現できない関係は、この物語に奥行きを与えている。

60年ほど前に、この本を読んだとき、私はアンドレイが好きになった。このことはよく憶えている。今回読み直してみて、私は自分自身にアンドレイと似たところがあると感じた。そのことを16歳の私は直観的に感じ取っていたのではないかと思う。アンドレイは、社交界に気安く融け込まず、自分を一步離れたところに置いており、すべてを客観的に見ている。しかし、皇帝出御の華麗な舞踏会で、騎兵大佐の白い制服姿でナターシャと踊り、彼女の心を射止めるという一面も持っている。ボロジノの会戦に先だって、総司令官クトゥーゾフから副官になるよう求められるが、総司令部の官僚的な雰囲気嫌って、部隊勤務に付くのだ。

今回私は、アンドレイだけでなく、ピエール・ベズーホフも興味深い人物だと思った。また、前には強い印象を受けなかったニコライ・ロストフが世の中をうまく渡っていく人を代表しているように思えた。勇敢な騎兵中隊長として戦功を挙げたニコライは、ボロジノ会戦直前に、領地の百姓一揆によって苦境に陥っていたマリヤを救い出す。たった一人で多数の農民を威圧し、一揆を解散させてしまうのだ。この場面は実話に基づいているのだろうが、当時の貴族地主と領民の関係を描いた興味深い話になっている。この運命的な出会いがきっかけとなり、戦後暫くしてから、マリヤと結婚し、ボルコンスキー公爵家の領地を上手に経営し、それを梃子にして、傾いていたロストフ伯爵家の家産をも挽回するのだ。ニコライは根っからの体制派で、アレクサンドル1世を崇拝する好人物だ。

トルストイは、自分とは対極的な人物としてニコライを描きたかったのだろう。

この物語は、絢爛たる帝政ロシア貴族社会の叙事詩としての性格を持っている。しかし、トルストイが語りたかったことがもうひとつあった。それは、ロシアの魂とでもいうべきものがあるということだ。これは、農民出身のプラトン・カラターエフという兵卒（ナポレオン軍のモスクワ占領中に捕虜となる）の口から語られるもので、思想や哲学に捉われていたピエールに強い感銘を与える。カラターエフの語りには東洋的なものが感じられる。

この本は古典のひとつであり、ヨーロッパやアメリカで読まれている本のランキング調査において、現在でも常に上位を占めているそうだ。古典というものは、それを読めば直ぐに何かの役に立つというものではない。読む側の環境や心境などが変わると、異なるものを見せてくれる博物館のようなものだ。確かに「戦争と平和」はそのような本のひとつと言えるだろう。

(おわり)